

一八八六年四月十三日(火)

イーシラ・コーテ
神の分身に業の報い、前生からのカルマの発現はあるか?——ヨーガ・ヴァシシュタ

明けて火曜日、ラーマナヴァミー(ラーマの誕生祭、ボイシヤク一日。一八八六年四月十三日、朝方、タクール、聖ラーマクリシュナは上の部屋のベッドに坐っておられる。八時すぎ。モニは昨夜泊まったので、先ずガンガーで沐浴をすませてから部屋に入り、タクールにごあいさつをした。ラーム(タッタ)もちょうど来たところで、ごあいさつの後、そのへんに坐った。彼は花の輪飾りをもってきてタクールにさしあげた。信者たちの多くは階下^{した}にいる。二、三のものがタクールの部屋にいただけである。ラームはタクールと話をはじめた。

聖ラーマクリシュナ「(ラームに)——どんなふうに見える?」

ラーム「あなた様の中にはすべてが存在します。もうすぐ、あなた様のご病氣のことを皆で相談なさるのでございましょう」

聖ラーマクリシュナは微笑しながら、合図^{ジェスチャー}でラームにお聞きになる——「病氣の話だつて?」

タクールのスリッパが合わなくて足が痛い。それで、ラジェンドラ・タッタ先生が注文して作つてくるといっているので、タクールの足の寸法を測った。(この履物は現在、ベルール僧院^{マト}に祀られ拜まれている)

聖ラーマクリシユナは、こんどはモニに手まねでお聞きになる——「ほら、石のお椀は？」モニはすぐに立ち上がって——さつそく石の椀を買いにカルカッタへ出かけて行くこうとする。

聖ラーマクリシユナ「いいよ、いいよ。今でなくても……」

モニ「いえ、この方々もカルカッタに行かれますので、いつしよに参ります」

モニはジョラシャンコの新市場ニューバザールの四つ辻にある店で、白い石椀を一つ買った。ちょうど正午ひるころ、コシボールに戻ってタクルのところへいき、挨拶をし石椀を献じた。タクルは白い椀を手にとって眺めていらつしやる。そこへラジェンドラ・ダッタ医師、ギターを持ったスリナート医師、ラカール・ハルダー氏、そしてあと数名の人が来て座に着いた。部屋にはラカール、シャシー、若いナレンたちがいる。医師たちはタクルの病状をあますところなく聞きとつた。

スリナート医師「(友人たちに)——すべてのことは、ブラクリティの支配下にあるんだよ。誰も自分のした行為の結果から逃れることはできない！ プラーラブダ(前生からのカルマの発現)だ！」

聖ラーマクリシユナ「どうしてさ。あの御方の名をとなくて、あの御方を想つてあの御方にすべてを明け渡していれば……」

スリナート医師「しかしですね、プラーラブダ・カルマはどうなりますか？——前の生涯で行つたことは」

聖ラーマクリシユナ「そりゃ、いくらかは行為の結果を受けとらなけりゃならんさ。だが、あの御方の名前の力で、大部分は取り消しになる。ある人は前生の行いのために、七回生まれるたびにメク

ラになる筈だった。ところが、その人はガンガーで沐浴して、その功徳で解脱した。その人の目は治らなかつたけれど、次の六生は盲目めくらにならずにすんだ」

スリナート医師「しかし經典には、過去の行為の結果からは誰も逃のがれることができぬ、と書いてあります」

スリナート医師は、タクルと議論するつもりらしい。

聖ラーマクリシュナ(モニに)「お言いよ。神イーシュワラ・コーテイの分身と普通の人間とは、全くちがうということジワ・コーテイを——。イーシュワラ・コーティは罪や過ちとは関係がないんだということを——お言いよ」

モニは黙っていた。そしてラカールに、「君、言つて下さい」とたのんだ。

しばらくして、医師たちは帰つていった。タクルはラカール・ハルダー氏と話していらつしやる。ハルダー氏「スリナート医師はヴェーダーンタを学んでいまして——ヨーガ・ヴァシシュタ(訳註)の学徒です」

聖ラーマクリシュナ「世俗の生活をしている者が、この世はすべて夢だなどと思つているのはよくないんだよ」

一人の信者「わたしの知つているカーリーダースという人は——やはりヴェーダーンタの学徒ですが、訴訟ばかりして財産をなくしてしまいました」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッハ、すべてはマーヤー——けれども、やはり訴訟はしなけりや、というわけさ！(ラカールに向かつて)——ジャナイのムクジエーは、はじめのころ大きなことばか

り言っていたが、終いの頃はよくわかるようになったよ！ 体の加減がよかったら、スリナート医師たちとも何か話すんだが——智識の話ばかりしていたとて、智識が得られるわけではないさ」

〔情欲を持たぬ清浄な境涯を思つてタクルの肌毛が逆立つ〕

ハルター「智識にはさんざ会いました。これからは、少しでも信仰が持てたら救われるのですが——。先日、ある問題を胸に抱いて此処こゝにまいりましたのですが、あなた様がそれを解決して下さいました」

聖ラーマクリシュナ「(熱心に) ナニ？ ナニ？」

ハルター「はい、この青年(若いナレン)が入つて来たとき、『あれは情欲を克服している』とおっしゃいました」

聖ラーマクリシュナ「ホー、そうだったかい。うん、あれ(若いナレン)には、世俗の汚れというのがこれっぽっちもないんだよ！ 情欲つてどういうものですか、なんて言うんだよ。

(モニに)——手でさわつてごらん、わたしの肌毛が逆立っているから！」

情欲をもたぬ清浄な境涯を思つて、タクルの体毛は逆立つたのである。情欲のないところに神はいらっしゃる——このことを思うとタクルはすぐに神をお感じになつたのであるうか？

(訳註) ヨーガ・ヴァシシュタ——聖仙シヴァシシュタがまだ若いラーマに会話形式で教えを説いたヴェーターンタの聖典

ラカール・ハルダは帰った。

聖ラーマクリシュナは、まだ信者たちと坐っていらつしやる。一人の気狂い女がタクールに会おうとして、皆をうるさがらせていた。狂女は、愛人の態度^{マドロウ・パレヅ}をとっているのである。別荘にやってくるのは皆のスキをねらつて、タクールの部屋に走りこむのだ。信者たちはブチさえたのだが、どうしても止めることができない。

シャシー「あの気狂い女がきたら、突きとばして追い出してやりましょう」

聖ラーマクリシュナ「(慈悲深い声で) いや、いや、来ても出ていくんだから——」

ラカール「はじめのころは、私もいろんな人がタクールのところに来るたびにヤキモチを妬^やいたものです。でもこの方はお優しく、だんだんと私にわかるように導いて下さった——この良き師^{グズ}は、世界の師であるということ^{グズ}をね！ この方は、私たち何人かだけのためにこの世に来られたのでしょうか？」

シャシー「そういう意味で言つたんじゃないやありませんよ。タクールはご病気でしよう？ それなのに、ご迷惑をかけてはいけませんよ」

ラカール「迷惑はみんながおかけしています。我々は(靈的に)立派になつてから、ここに來ているんだらうか？ この方に私たちは、ご苦勞をかけていないだらうか？ ナレンドラたちは初めのころ、どんなふうだった？ 議論を吹っかけてばかりいて……」

シャシー「ナレンドラは、口で言つたことはちゃんと実行しますよ」

ラカール「サルカル医師のタクールに対する物の言い方はどうだろう！ よく考えてみれば、あやまちを犯していない人なんか一人もいないんだから——」

聖ラーマクリシユナ「(ラカールにやさしく)——何か食べたかい？」

ラカール「いえ、まだです。あとでいただきます」

聖ラーマクリシユナは、モニに手まねでお聞きになる——「お前、今日ここで食べていくかい？」
ラカール「(モニに)——ここで食べるようにとおっしゃっているのですよ」

タクールは五つ位の子供のように裸のまま信者たちと坐っけていらつしやる。折も折、気狂い女が階段を上がってきて、部屋の戸口のところに立った。

モニ「(シャシーに、静かな声で)——ごあいさつして帰るように言うところですよ。ほかには何も言わずに……」

シャシーは狂女を階下に降ろしてやった。

今日は新年の初めの日なので、女性の信者たちが大勢やってきた。タクールと大聖母（シュリー・シュリー・マー）に新年のごあいさつを申し上げて、来る年を祝福していただくためである。バララム氏の奥さん、マノモハンの奥さん、バグバザールのバラモン婦人等々、大勢の婦人信者たちが来ていた。なかには子供連れで来ている人もある。(訳註、大聖母——サーラダー・デーヴィー||ホーリー・マザー。バグバザールのバラモン婦人——ゴラブ・スタラー・デーヴィー||ゴラブ・マー)

彼女たちは、タクールにごあいさつのため階上の部屋に行つた。何人かの婦人は、タクールの足も

とに花やアビール(お祝いのお祝いのときに振りまく赤い粉)をお供えした。信者の子どもで九つか十の女の子が二人、タクールに歌をうたってお聞かせした――

何処どこから来て、どこへ行くの

安息やすらひは何時いつ、どこにあるの

輪廻の輪に、又もどって泣き笑い

終わりはないのか、空しい暮らし

歌 さあ、ヴィーナに合わせて、ハリ、ハリと称よなえよう！

歌 若い女性(ラーター)が来たよ、ほら、そこに

クリシユナが来たよ、ほら、そこに

弓のような目をして、竹笛ふいて……

歌 私の舌よ、いつもドゥルガーの名を称よなえよ

ドゥルガーのほかに、おまえを救うものがあるか？

聖ラーマクリシユナは手まねでおっしゃる——「とてもいいよ、マー、マーって！」
バグバザールのバラモン婦人（ゴラーブ・マー）は子供っぽい性質の人だ。タクールはニコニコしながらラカールに向かつて合図をなさった——「あの人に歌ってもらえ」バラモン婦人は歌った。信者たちは楽しそうに笑っていた。

ハリよ、今日はあなたと遊びましょ

ニドゥの森に、ひとりでいるあなたと——

婦人信者たちは階上の部屋を退^{さが}って階下におりてきた。

午後——タクールの傍にモニほか、二、三の信者が坐っている。そこへナレンドラが入ってきた。聖ラーマクリシユナがうまい表現^{たとえ}でおっしゃったように、彼はいつも拔身^{ぬきみ}の刀を下げて歩いているような感じだ。

〔出家の厳しい戒律とナレンドラ〕

ナレンドラは部屋に入ってタクールの傍に坐った。彼はタクールに聞こえるように、「女はつくづく嫌だ」と言う。神をつかむ道中において、女というものはどれほど邪魔になるか、というようになことを語る。

聖ラーマクリシユナは何もおつしやらず、彼の言うことだけを聞いておられる。

ナレンドラはつづけて言う——「僕はただ、平安シヤンテイがほしい。神まで欲しいとは思わない」聖ラーマクリシユナはジーツと彼の顔をみつめていらつしやる。何もおつしやらない。ナレンドラはときどき歌うようになるとなえている——「サッテイヤム、ギヤーナントム『ラフマンは真実、智識、無限なり』」夜の八時。ベッドの上に坐つておられるタクールの正面に、二、三の信者が控えている。スレンドラが、会社が退ひけるとすぐタクールのお見舞いにやつてきた。オレンジ四個と花輪を二つ持つてきた。スレンドラは信者たちの方を時々見たり、タクールの方を見たりしている。やがて、胸にたまつていた言葉をすっかり吐き出した。

スレンドラ「(モニたちの方を見ながら)——「会社の仕事を終えてから、すぐ来たんですよ。まったく、二つの舟に足をかけてもどうにもなりませんからねえ。とにかく、会社の仕事だけすまして来たようなわけです。今日はボイシヤク月の一日ついたちで、しかも火曜日でしょう。でも、カーリーガート(有名なカーリー寺院がある所)には行きませんでした。こう思いましたね——「カーリーであるお方——カーリーを一番よく知つていらつしやるお方にお会いすれば、それでじゅうぶんだ」と(訳註——今日はベシガル暦の元旦で、さらにカーリー参拝に縁起が良いとされる火曜日でもあったので、非常にめでたい日であった)

タクール、聖ラーマクリシユナは、少しお笑いになった。

スレンドラ「グルに会うときやサードゥに会うときは、果物や花を持っていくものだと聞いていましたので、これを持参した次第です。あなた様のために私はお金を使っています——そして至聖かみさま

はその心の内をよくご存知なのです。人によっては一パイサ出すのも惜しがるし、そうかと思うと千タカ使つても平気な人もある。至聖かみさまは信者の心の内の信心バクテをご覧になつて、それを見てお受け取りになるのでしょうか」(訳註——「タカ」十六アナ「六十四パイサ」)

タクールは頭を前後に動かして、「お前の言う通りだ」との旨むねを彼に合図なされた。スレンドラは再び言う——「昨日は来られなくて……。——大みそかでしたからね。そのかわり、あなた様の写真の前に花をかざりました」

聖ラーマクリシュナはモニに手まねでおっしゃった——「ア、何て信心深いんだろうね！」

スレンドラ「今日は来られましたので、この二つの花輪を持ってきました。四アナでしたよ」

信者たちはほとんど帰つて行つた。タクールはモニに、「足をさすつて、扇いでおくれ」とおっしゃつた。